

## 四十七人の同級生

高橋 芳雄

大正五年四月、和田尋常高等小学校へ入学した四十七人の同級生の一人として、大平先生の過ぎ去りし日々を偲ぶ昨今です。当時は、かすりの着物に草履をはいての通学であり、麦飯なので弁当は持っていかず、一時間の昼休みには往復二十分ぐらしかけて家に走って帰って昼食を食べたものです。小学生でも家に帰れば親の手助けのために、あまり遊ぶ暇もないような時代でした。

先生は身体が大きいのおとなしく目立たない生徒でした。兄の数光さんと弟の芳数さんとがともにきかん坊で、取っ組み合いの兄弟喧嘩をよくしていました。その仲裁役はいつも大平先生でした。学校の成績は二、三年頃からとくに良くなり、先生は二宮金次郎式に教科書と参考書をよく読んでいました。しかし唱歌だけは当時もあまり良くなかったと思います。目上の人はマーチャンと呼んでいましたが、私も子どもは子供同士で大平、大平と呼び捨てにしていました。その頃から先生の周りには、なんとなく皆が集まってきたものです。

四年生のときだっと思えますが、摂政宮（現天皇）が陸軍大演習で詫間町にお見えになられたとき、雨の中を全校生徒が迎えにいきました。そこで、場所は忘れてしまいましたが、あるお寺で昼食用として餡パンをもらったのを、先生と私が待ちきれずにすぐ食べてしまい、そこに甘酸っぱい白餡が入っていたのを、いまでもその形と味までよく覚えています。それから六年生になったときに、遠足で琴平町へ汽車に乗って行ったことがありましたが、そのほかはあまり村の外に出かけるといふことはありませんでした。

ともかく「末は博士が大臣か」といわれた時代でしたが、もちろん当時は先生が一国を代表する総理大臣になられようとは、同級生の誰もが予想していませんでした。

このあと先生は高等科一年から三豊中学校へ進学されて、私ども村に残った者とは顔を合わせる機会のないまま、昭和二十七年の衆議院議員選挙となりました。この間、昭和十四年頃に、先生が興亜院事務官として北支へ飛行機で赴任していったというのを新聞で読んで、これは偉くなっているな、と思ったことを記憶しています。

昭和二十七年二月に、豊浜町によろず屋旅館に同級生四十人ぐらいが集まりましたが、二十数年ぶりの再会にもかかわらず、先生はちつとも偉ぶらずに、同級生の名前を覚えていて、肩を叩いてよろしくたのむとご挨拶して廻ったのには、皆びっくりしたものです。

この初選挙では、同じ和田村から佐野増彦という石橋湛山系の新人が立候補しましたが、こちらは河出書房の編集者出身とかで雄弁でした。それに引きかえ、先生の演説は、アメリカ視察報告というような内容で、日本とアメリカの食生活の差がどのくらいあるかなどを話すのですが、言葉がうまく出てこないし、面白おかしく話すというわけでもないのです。あまり人気は沸かなかったと思います。しかし、同じ村の同級生の立候補ということで、私どもは何とか力になりたいとの一心で、あちらこちら自転車で乗って走り廻った結果、見事に当選されました。あれから十二回目の総選挙の最中に逝去されるまでの間、私は同級生の一人として、誇りをもって先生のお手伝いをさせていただきましたことを、幸せに思っています。

昭和五十五年三月に、激務の合間を割いて、私ども同級生一同に総理官邸と瀬田私邸とを訪問させていただく機会を与えて下されたことは、私にとって一生忘れられない思い出となっております。六月十二日早朝の急逝にはただ呆然とするばかりでした。先生のご冥福をお祈りするのみです。

(和田尋常高等小学校同級生)